

Title	中近世地中海地域のムスリムの旅人たち
Sub Title	The medieval and early modern muslim travelers in the Mediterranean world
Author	湯川, 武(Yukawa, Takeshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.2・ 3 (2011. 6) ,p.119(217)- 123(221)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム：地中海世界の旅人たち：中世から近世へ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110600-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中近世地中海地域のムスリムの旅人たち

湯川 武

1. はじめに

講演のタイトルは「中近世」となっているが、ここでは、一五世紀までのいわゆる「中世」と呼ばれる時代を中心に論じる。また、地域的には、「地中海地域」といえばイタリア半島・シチリア島の線をほぼ中央にして西と東に分かれるが、そのうちの西地中海に面した地域（すなわち、北アフリカ＝マグリブとイスラーム領のイベリア半島＝アンダルス）出身のムスリムたちの「旅」とその記録を中心に扱うことにする。

マグリブ・アンダルスのムスリムたちの旅の記録は、西暦一二世紀の頃からのものが数多く残されている。それらの旅の記録は全体として「旅行記（リフラ）文学」と呼ばれるが、その多くはメッカ巡礼に関連したもので

ある。著者はウラマーと呼ばれる学者・知識人が占めている。

それらの旅行記の中でも、イブン・ジュバイル（一〇四五―一二一七年）やイブン・バットウータ（一二三〇―一三六八／六九年）の旅行記は特に名高く、日本語訳も出ているほどである。また、中世イスラーム最大の思想家の一人とされるイブン・ハルドゥーン（一二三二―一四〇六年）も『イブン・ハルドゥーンの自伝、そして彼の東西の旅の記録』という本を著しており、一般に『自伝』と呼ばれているが、上に述べた「リフラ文学」に属しているとも考えられている。

これらの三冊の有名な「リフラ文学」を中心に、中世のマグリブ・アンダルスの人々の「旅」を考えてゆくことにする。

2. 中世のムスリムの旅

そもそも近代以前のムスリムたちはどのような目的で旅をしたのであろうか。商業とメッカ巡礼と学問を求めていることが旅の主要な目的であったことは広く認められている。ムスリムたちが自分たちの住んでいる比較的狭い地域の中を、何かの用事で移動することはよくあったであろうが、そういう狭い地域を越えて遠距離を旅することは、そんなに誰にでもあったわけではない。

上に述べた、旅の三つの目的、すなわち、商業・巡礼・学問は、たとえば商業であれば商人たちが、学問であればウラマーが中心であったのは当然である。メッカへの巡礼は、商人やウラマーだけでなくさまざまな人たちが出かけたことであろう。そして、さらに重要なことは、多くの旅人たちが、上記の三つの目的を、同時に二つあるいは三つとも果たしながら旅をしたということである。例えば、上に述べたイブン・ジュバイルの旅は、メッカ巡礼を目的にしながら、メッカ巡礼の旅の往路・復路に回り道をして、さまざまな学者を訪ねたりする旅の典型とも言える。そして、旅の費用は途中でさまざまな小規模な商いをしながら賄うのがごく普通であったと

言われている。

これら三つの目的以外にも、未知の地についての地理的好奇心・探究心などを抱いて旅をした人もいたことであろう。イスラーム中世には地理書がいくつも書かれているが、その著者（地理学者）たちは、そのような知的探究心で未知の地を旅したことであろう。上述のイブン・バットウータの旅行記にもそういった側面が強く見られて興味深い。

また、ある支配者から他地域の支配者への外交使節として派遣された者も少なからずいたに違いない。しかし、残念ながらそのような外交使節の旅の記録はほとんど残っていない。もちろん、現代の私たちが楽しむような「楽しみ」としての旅や観光旅行は、まったくなかったわけではないだろうが、わざわざ遠距離を、危険を冒してまで出かけるということはなかった。

3. 旅のインフラ

上に述べたような旅は、どのような条件の下でできたのであろうか。

交通手段としては、現代のような長距離を大量に高速で運べるようなものは望むべくもなかった。陸路なら、

徒歩・ラクダ・馬・ロバなどが主要な移動手段として活用されていた。海や川なら、船が使われた、地中海では沿岸地域のムスリムの船と並んで、一二世紀頃からはイタリヤ船もよく使われた。

旅をするには費用がかかるが、その費用を賄うために個人の資金のほかには、商業のための旅ならば、その商売に投資する人々からの資金も使われた。現金以外にも小切手に相当するものも使われたという。また、巡礼や学問の旅をする人たちは、出発地から始まって、旅の途中の各地の特産物を順次売買しながら、費用を捻出することもよくあった。また、ウラマーならば途中で講義をしたり教えたりして謝礼をもらうこともあった。

道中の寝泊りは、例えば、砂漠や町や村落のないところでは野営をしたが、比較的大きな町では宿屋などに泊まった。旅人たちの宿泊施設は、マグリブ・アンダルスではフンドウクと呼ばれたが、これは東方のイスラーム圏（マシユリク）ではハーンと呼ばれているものと同じである。主として隊商のための宿泊施設として荷駄獣も人間とともに滞在でき、荷物を置く場所も商人が泊まる部屋も備えられている施設である。マグリブから東へ向かう街道筋にどれくらいの数のこれらの施設があったか

は、現在の研究でははっきりしていないが、少なくともある程度以上の大きさの町には、大きさの違いはあれ、たいてい複数の宿泊施設があったと考えられる。

また、これとやらんで重要なのは、中世のイスラーム圏の各地には、旅人たちに対して無償で宿や食糧を供給することが行われていた。これは、一般には「ワクフ」、マグリブ・アンダルスでは「ハブス」と呼ばれた公共的福祉的目的のための財産信託制度に支えられるもので、この制度のおかげで、多くの巡礼たちやその他の旅人たちが、比較的安い費用で長距離の旅ができたのだと考えられる。

上記の諸要素とともに忘れてはならないのが、道中の安全の維持である。巡礼路は商業路と重なることが多いが、ムスリムの地域支配者のものとも重要な役割はそのような街道の安全を維持することであった。そのような旅の安全を保障することをヒマーヤと呼ぶが、支配者にとって、例えば、自らの領域を通過する巡礼たち（巡礼団）にヒマーヤを与えて安全を保障することは、支配者の権威を示すものとも重要なシンボリック行為の一つと考えられた。非ムスリムの商人たちなどには、同じようにしてアマーンと呼ばれる安全保障が与えられた。こうし

て巡礼たちや商人たちは、支配者たちが与える安全保障に順次守られて旅を続けることができたのである。支配権が確立していない地域の遊牧部族などにも、政治的影響力を及ぼして保護をあたえさせるか、安全通過料とでも言うべきものと引き換えに旅の安全を保障してもらうことをした。遊牧部族の過剰な介入や妨害に対しては、支配権力が軍事力をもって対処することもあった。

それとならんで大事なのは、イスラーム社会の文化的な氣風である。経済的に少しでも余裕のある人たちは、巡礼や学者などの旅人たちに、施しをしたり、親切で寛大な応対をしたりすることが道徳的価値のあることだと考えられていた。このような氣風も旅を支える要素の一つであったと言える。

旅人たちは、巡礼にせよ商人にせよ、安全のために普通は複数で旅をしたが、マグリブやアンダルスからメッカへ向かう巡礼団は数百人規模という大きなものであったようである。イブン・バットウータの旅行記には、現在のチュニジアからリビア西部までの区間で一〇〇騎の護衛がついたという記事がある。巡礼団は商人の集団である隊商とともに旅をすることが多かったと言われている。

4. 地中海世界のヒトの流れ

このような「旅のインフラ」に支えられて、地中海地域のムスリムたちは旅をしたのであるが、その旅人たちの流れを、地理的に概観してみると以下のようになる。アンダルスとマグリブ間、アフリカ内陸部と地中海沿岸地域間、マグリブ・アンダルス（西方イスラーム圏）とエジプト以東の諸地域（マシユリク、東方イスラーム圏）の三つの大きな流れがあった。

マグリブ（アフリカ側）とアンダルス（イベリア半島）とは中世には、全体として一つの地域という認識もあったので、心理的には比較的近いという感覚があったようである。それに比べると、他の二つ、すなわち南北と東西の大きな流れは、まさに長い距離を結ぶ流れであったと言える。

先述したイブン・バットウータはこれら三つの流れをすべて踏破した上、さらにはそれを越える諸地域にまで旅した、まさに大旅行家だったのである。また、イブン・ハルドゥーンの著作は第一のマグリブとアンダルス間のさまざまな地点を遍歴し、人生の後半にはエジプト・シリアさらにはメッカにまで足跡を残したことを記

している。イブン・ジュバイルの旅行記は、アンダルスからメッカ巡礼に出かけた旅の記録であるが、彼の場合の特徴は、アフリカの地中海沿岸の陸路を取ることなく、イベリア半島からシシリー島経由でイタリア船に乗って地中海を横断し東岸まで渡ったところにある。復路も同じようにして故郷に戻っている。このような旅の仕方は一三世紀初め頃までは可能であったが、それ以降はなくなっている。地中海におけるムスリムとキリスト教徒との関係の変化によるものであろうか。

5. 知的営為としての「旅行記」

最初に述べたように、マグリブ・アンダルスのムスリムたちは多くの「旅行記文学」を残している。その著者たちはウラマーと呼ばれるイスラームの学者・知識人である。ムスリムとしての立場から彼らの「旅」への関心はメッカ巡礼と学問に限られている。彼らの旅行の記述は、巡礼旅行に直接関連する事項と、旅の途中で会った学者・知識人との学問的交流などに限られているといつて過言ではない。それぞれの著者が郷里に帰ってからのウラマーとしての社会的地位と權威がそれらの旅の経験から評価されるがゆえに、彼らは各地で訪れたり会った

りした東方の学者たちのことを詳しく書いたのである。そこには、マグリブやアンダルスの人々のイスラームの中心地域の諸地方の学芸に対する憧れが強く反映されている。

そのような一般的な傾向を先にあげた三人の著者たちも共有しているところがある。しかし、三人の著書それぞれには、それぞれの独自性がある。もっとも特徴的なのは、イブン・ハルドゥーンの著作である。そこには自伝的な要素が強く、地理的な移動としての「旅」への関心よりも、各地の政治情勢、ことに自分自身が巻き込まれた現実の政治状況と人間関係への関心が中心に描かれている。「旅行の記録」としてよりも、『自伝』としてそれが現代にまで伝えられている理由もそこにある。

これまで述べてきたようなムスリムたちの旅も、一六世紀以降になると政治・経済・社会・文化など諸状況の変化の中で、それ以前とは異なる様相を少しずつ見せるようになった。地中海へのヨーロッパ諸勢力の進出が次第に強まり、ついには地中海の南側の沿岸地域までもがヨーロッパの勢力圏に組み込まれる一九世紀に至って、中世とは全く異なる様相を示すことになったのである。